

蓮如上人のこ一生

愛別離苦のなかで

「愛別離苦」(あいべりく)ということはがあります。

仏教では、むかしから、最も根源的な苦悩として生・老・病・死の四つをあげますが、それに加えて最も具体的な生々しい苦しみとして、この「愛別離苦」(き)などの四つを挙げ、四苦八苦とかぞえています。

「愛するものとの別れのつらさ」。

そのうち、母と子の別れほど、なにも増して悲しいものはありませんまい。

お釈迦さまも生まれて間もなくおかあさまと別れなければなりませんでした。親鸞様も同様幼くして母を失われました。お釈迦様も親鸞様も、人生最大の苦悩の中から切実に道をもとめ求めて、仏教・真宗をお開きくださったのです。

布袋丸(のちの蓮如)は六才になつていまし。

応永二十七年秋深い日のことです。おかあさまから呼ばれ、今まで見たこともない緋色の《鹿ノ子絞りの小袖》を着せられ、絵かきのおじさんに肖像画を描いていただきました。

その鹿ノ子絞りの肖像の絵ができあがると、母は、布袋丸をしっかりと抱き、涙ながらに申しました。

ます、おとうさま(存如上人)には正式な奥様がお決まりです。私はもうここにいてはならないのです。今度これられるおかあさまによくお仕えするように。

次に、親鸞聖人のおひろめ下さった正しいお念佛を、どうぞ人々に伝えてあげてください。そうしてこの本願寺を再興するのがあなたの一生のお仕事です。このように言い残されたおかあさまは、その年の十二月二十八日、布袋丸の肖像だけを

胸に抱いて、いすこともなく姿を消されたでしょう。八十五歳で亡くなるまで実の母を探し求められたといいます。

その悲しみにつけても思い出されるのは、お母様の残されたことばでした。

愛別離苦のこの苦しみ悲しみを、越えさせて下さるのはお念佛しかない。今の時代、私と同じ苦悩を背負って生きている人々へ、このお念佛を伝えることが私の一生の仕事でなければならない。

ことに、背負い切れないほどの差別・苦悩の中にあえいでいる母と同じ「女人」に、母のかたみのお念佛を伝え、お念佛のなかで「共に朋(とも)として生きる」本願寺教団を興していかなければならないのだ。

幼い蓮如さまは、愛別離苦のなかからそう決意され、生涯その決意を貫き通されたのでした。



御門主さま

大谷 光真(法名を即如)さまと申します。

昭和二〇年八月に前の門主光照(法名 勝如)さまの長男としてお生まれになりました。

昭和四十六年 竜谷大学大学院(真宗学)修士課程終了後、東京大学大学院(印度哲学)にまなばれ、昭和四十九年に修士課程を終了なきました。

昭和五一年、三十三才で本願寺門主となり、昭和五十五年『教書』(門主一代の教化方針)を発布以来、その趣旨徹底のため全国の組に巡教し、住職・門徒との直接の話し合いに日夜努力精進しておられます。

六月三〇日より七月一日、出石組に巡回することになります。

ご巡教の詳細は後日連絡いたします。

春の研修会

大盛会

4月22日

まずボーリング大会。豊岡協和ボールへの参加数15名。接戦の末、副住職西池匡氏が優勝してトロヒーを獲得した。表彰式のあと、研修会には老若50名が参詣し、正信偈のおつとめのあと、オーム真理教のことと関連して「仏教～無常偈(いろはうた)に聞く」と題したご法話。タイムリーな問題のなかで改めて「仏教」を学ばせていただいたと特に若い参詣者に好評であった。つづいての懇親観桜会では、最新購入のCDカラオケで盛り



上がる中、日本舞踊あり民謡あり、さらに和太鼓の絶妙な演奏もあって例年を上回る盛り上がりを見せた。

五月のこよみ

一日	専福寺様法事・永代経
二日	正福寺住職退職・継職法要準備
三日	正福寺住職退職・継職奉告法要
四日	日高植田氏宅法事
五日	兼井元三郎氏宅祥月
六日	出石組『連研研修』(連続研修)
七日	玉日会定例法座
一〇日	連研中央教修→一五日まで(本廟)
一一日	連研中央教修→一五日まで(本廟)
一三日	中島俊昭氏宅法事
一四日	枚方市中西正氏宅忌明
一六日	十六夜会定例法座
二〇日	兼井通夫氏宅法事
二一日	降幡誕辰会・合同役員会
二六日	中島武志氏宅忌明
二七日	みのりを聞く会定例法座
二九日	藤本勉氏宅忌明
二八日	西宗寺様法事
三月二十九日	西宗寺様法事
四月五日	大月忠男氏宅忌明
四月八日	蔭山房雄氏法事
四月十六日	藤本健一様
五月八日	大月ちか様
五月十六日	暮坂健一様

大月 帽子
藤本 健一
暮坂 健一
桑田 健一
孫と一緒にお念佛前

三月二十九日

枚方市

坪口

奥栗尾

はな様

中島ふさこ様

坪口

はな様

大月

ちか様

暮坂

はな様

藤本

健一様

暮坂

はな様

桑田

健一様

暮坂

はな様

孫と一緒にお念佛前

暮坂

はな様

桑田

健一様

暮坂

はな様

藤本

健一様

暮坂

はな様

孫と一緒にお念佛前

暮坂

はな様

桑田

健一様

1995(平成7)年5月1日

兵庫県出石郡出石町内町59番地

諸行無常

阪神大震災の中心地であった西宮の西福寺さまの門前の掲示板に、四月一日、次ぎのような法語が掲げられました。

咲く花も
もみなし
法へのりを説く
そしてまた、この寺から出されている『慈眼』という寺報に、この法語についての思いが、おおよそ次ぎのように述べられておりました。

◇
百花繚乱、春爛漫などと、浮かれていた季節になりましたが、今年の春は、なかなか例年のようには参りません。

一月十七日未明の兵庫県南部大震災の爪痕が、まだあまりに生々しいからです。

五百余人の尊い人命が損なわれ、三〇万人の人々が住む家を失いました。

前年の晩まで睦まじく語り合っていた親子・夫婦・兄弟が、一瞬にして生死をへだて、無残に死に、あるいは危うく生き残りました。この世はなんと悲惨なところであります。

しかし、あれから二ヶ月半。復興の動きは至るところに見られます。新しい命の花が、今や咲きはじめたようあります。

今わたしは、仏教の旗印である、諸行無常といふことばを、考えさせられております。

『諸行無常』。

すべてのものは移り変わる。人間にも、いつ何時、老いと死とが襲い掛かるか知れない。

しかし、諸行無常は、なにも老いと死の到来だけを意味するものではありません。

移り行く無常な世の中であるからこそ、次ぎの力が湧き起ることができるのです。

人生は無常です。だからそれを越える力で頑張らうではないか。苦難に負けず、に力強く生きることをも教えてくださるのが仏教のこの言葉でありました。

お釈迦さまの、お弟子たちに対する最

後の遺言を思い出します。

「すべてのものは、移り変わる。だからあなたたち、つとめ励みなさい」

お釈迦さまの、お弟子たちにありがとうございました。

「ご援助ご支援、ほんとうにありがとうございました。」

◇
諸行無常(2)
春の研修会のご法話を聞いて

『有為の奥山』とは、ほんによく言った

もので、『有為』というのは、作られたなんでも、『有為』といふことは、作られたもの。作られたものだから、いつかは壊れてしまうもの。この世にある在とあらゆるもの、作られては壊れ、出来てはすぐ無くなってしまう。どれ一つとしてこれが仏法今まであったということ。

今度はわたしが、世間に伝にやならないこれが仏法今まであつたということ。

の夢、一刻の酔いごこちを乗り越えて、変わり通し、移ろい通しのいのちではない、いつの世にも変わらぬ如来さまの、無量寿といういのちを當て頼りに、そこにいのちの足踏ん張って、しつかりと生き抜こうではないか。

これが仏法今まであつたということ。
今度はわたしが、世間に伝にやならないこれが仏法今まであつたということ。

（蓮如上人一代記聞書）

わたしひとりが：という思い上がり、供のときからわからんながら、あの無常偈。（ご法話のとき一生懸命書き写しました。はじめて知りました）

生滅滅曰寂滅為樂
それがあの「いろはに」という歌であるそう。（これも今度はじめて分からせてもらいました）

わしらみたようなものの、目も開かしてやらんとどもならんと、お釈迦様やら偉い坊さんやら、かんでふくめて、「当

頼りにして生きとったんでは、何年生きようと、諸行無常、空しいはかない一生よ」と教え論して今ようやつとおのれの諸行無常に目を開かせてもらつた。

目を開いたところが、そこへ仏法さま大声でどなられました。

「有為の奥山 今日こえよ」。

あしたを待つな今すぐに。
當てにならんあしたを當てにするな。

「浅き夢みじ 酔いもせず」一瞬、

の夢、一刻の酔いごこちを乗り越えて、変わり通し、移ろい通しのいのちではない、いつの世にも変わらぬ如来さまの、無量寿といういのちを當て頼りに、そこにいのちの足踏ん張って、しつかりと生き抜こうではないか。

これが仏法今まであつたということ。
今度はわたしが、世間に伝にやならないこれが仏法今まであつたということ。

（蓮如上人一代記聞書）

わたしひとりが：という思い上がり、

供のときからわからんながら、あの無常偈。（ご法話のとき一生懸命書き写しました。はじめて知りました）

青色青光
◎五月七日は出石組第九期『連研』が勝林寺で開かれます。今回は親鸞上人の生涯とそのポイントを学び、家庭での法要儀式についても勉強します。いま勝林寺からは坂本智左登・湯口美千代・中島明美・中島雪枝さんの四人の方々です。

◎寺の西池深音くんは四月から一年生。毎朝ほとけさまに行つてきますのごあいさつをして元気でかけます。◎深音くんの後ろに見える「貝塚伊吹」四本を植えてもらいました。駐車場から吹き付けるほこりがこれで幾分防げると思います。また、最近、本堂正面横に大きな「山法師」という木も植えました。境内にいっそ貴重ができたように思われます。

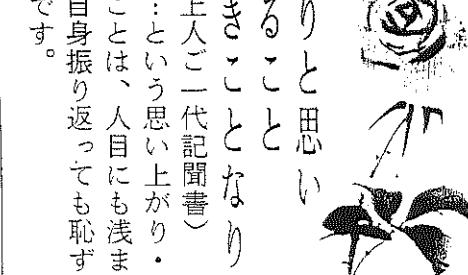
◎みなさまからお仏飯としてお供えくださつてお米の一部を、今度出石に開設された「こぶし荘」に、毎月提供させていただくことになりました。

◎本覚寺さまから教えていただいた「きゅうりの漬物」。みなさまにもおすそ分けします。簡単です。おためしください。

材料(分量)と作り方

キュウリ 1 箍 ビール 50cc さとうきび 35g

ビニール袋に入れそのまま冷蔵庫へ。四日ぐらいで漬かりますが、その間1~2枚袋のまま混せてやってください。



わればかりと思ひ
独覚心なること
あさましきことなり

(蓮如上人一代記聞書)

わしは生まれは禪宗でありまして、子供のときからわからんながら、あの無常偈。（ご法話のとき一生懸命書き写しました。はじめて知りました）

わたしひとりが：という思い上がり、供のときからわからんながら、あの無常偈。（ご法話のとき一生懸命書き写しました。はじめて知りました）